

=====

GCOE NewsLetter

[No.52 2012/1/27]

西洋中世(ラテン語)・近世フランス古文書学ワークショップ

「テキスト布置解釈学原論」(講義科目)の要約

「テキスト布置解釈学各論」(講義科目)の要約

2011年度第1回大学院学生海外派遣の調査報告

gCOEスタッフ海外出張報告

=====

■ 西洋中世(ラテン語)・近世フランス古文書学ワークショップ

ジャン＝ルー・ルメートル博士

ニコル・ルメートル教授

「西洋の手稿記録(4世紀から18世紀)を読む

Lire les manuscrits occidentaux, du IVe au XVIIIe siècle」

【日程】2012年2月20日(月)～22日(水)

【場所】名古屋大学文学研究科大会議室

【概要】ジャン＝ルー・ルメートル Jean-Loup Lemaître 博士とニコル・ルメートル Nicole Lemaître 教授を迎えて、西洋中世ならびにフランス近世の古文書学のワークショップを開催致します。3日間(午後)にわたり、前半をルメートル教授がラテン語古文書について、書体の変遷や短縮形(*abréviation*)を解説し、後半にルメートル教授が「印刷バタルド書体から個人の草書体へ *De la bâtarde imprimée à la cursive personnelle*」と題して論じます。お二人とも史料をふんだんにまじえて、連続講義とワークショップにのぞまれる予定です。なお講義や討論は基本的にフランス語で行い、通訳はありません。

詳しくは、

<http://www.gcoe.lit.nagoya-u.ac.jp/activity/activity04/post-5.html> をご覧ください。

■ 「テキスト布置解釈学原論」(講義科目)の要約

松澤和宏(2011年12月27日、2012年1月5、6、10日)要旨

今年度の講義では、まず最初に、テキスト布置の解釈学の概要について紹介した。テキスト解釈が、テキストとの対話を通して歴史的伝承に参加していく実践的な経験であること、そしてテキストが布置関係の結節点としてあること、テキストも解釈者も歴史的コンテクストを背負っていることなどを検討した。第二に、テキスト布置の解釈学の具体例として、バルベー・ドールヴィイの『罪の中の幸福』の解釈学的読解を試み、この小説が三つの水準で解釈できることが判明した。第三に、文化理解の特殊性について考察し、文化的事象が持っている有機的な連関を内側から把握しようと努める解釈学的理解の特質を考察した。最後に、ガダマー『真理と方法』の未邦訳の第三部をドイツ語原文、および英語訳、フランス語訳で読み進め、理解が他者と一体化を目指すものではなく、〈共通のもの〉を見出す営みであるとするガダマーの所説を吟味検討した。熱心な受講者のおかげで、終始活発な質疑応答や意見交換が行われ、有意義な講義となった。

■ 「テキスト布置解釈学各論」（講義科目）の要約

テキスト布置解釈学各論 I

大石和欣（2011年10月12、19日、2012年1月10、11日）要旨

My lectures reviewed hermeneutics in the field of literature, in particular, in the literature of eighteenth- and nineteenth-century Britain. Since the emergence of post-modern criticism, various hermeneutic interpretations have been presented to the studies of English literature in the period. My first lecture mapped out the general outline of hermeneutic literary criticism, starting with Biblical interpretations and leading up to Jacques Derrida and Hans-Georg Gadamer. A special emphasis was laid upon how these hermeneutic theories emerged in modern European philosophy, in particular, in the writings of Friedrich D. E. Schleiermacher. I then moved on to explore how these theories have been applied to interpretations of English Romantic Literature for the past forty years.

A few interesting model cases of hermeneutic literary interpretations were discussed in my subsequent lectures. My second lecture excavated the muddled responses in Britain to the outbreak of the French Revolution. Richard Price's view of the revolution as a repetition of the 1688 Glorious Revolution in Britain provoked a furious criticism of Edmund Burke, who saw it as a dangerous threat to socio-political

and socio-economical order under the monarchical system. Their dispute was followed by more than ninety attacks and counter-attacks between radicals and pro-Burkean anti-Jacobins. The controversy was concerned not only with interpretations of the political incident in France, but also with interpretations of political discourses on the basis of variegated views on the revolution. I attempted to show how the hermeneutic theory can be applied to examine these seemingly chaotic discourses on the French Revolution.

My third lecture took up parodies in the Romantic age. In the 1980s, Gérard Genette showed the mode and significance of parodies from a post-modern viewpoint. I suggested that parodies encompass not merely rhetorical and discursive distortions of the original text, but also political satires and social critiques of the original text, which the readers are expected to unravel and enjoy on their own footings. The hermeneutic circle can be considered as the essential feature of such interpretations of parodies both among the contemporary readers and among the readers in different periods. Taking up some examples including parodies of William Wordsworth's poems, the lecture observed that people have read different messages and meanings at a different time of history and in a different cultural context.

My final lecture was supposed to discuss— but it did not take place because of students' absence—how senses of history were created through hermeneutic interpretations of the French Revolution. I was planning to focus on the reportages by Helen Maria Williams, a dissenting female writer who migrated to France in 1790. From 1791 until her death in 1827, she continued to offer people in Britain eye-witness accounts of the ongoing process of the Revolution and its aftermath. Through her discourses, she kept revising her initial idealistic view on the revolution and repositioning herself in the ever-changing political milieu. Her serial *Letters from France*, in particular, are products of her ceaseless and unsuccessful attempts to review and reinterpret historical meanings of the Revolution. They thereby provide an interesting case of a hermeneutic interpretation in the literary context.

テキスト布置解釈学各論 II

フォヴェルグ・クレール (2011年11月28日、12月5、12、19日) 要旨

『百科全書』のテキスト布置

『百科全書』は二つの異なる布置を、すなわち事典の布置と百科全書の布置とを含んでいます。『科学、芸術、技術の理論的事典』としての『百科全書』は、

アルファベット順を用いて、語彙に加えて科学と技術それぞれの一般原理とそれらの詳細を記述しています。また『百科全書』としては、人間知識の一貫性を示しています。この一貫性は、『百科全書』の本文において主に参照の体系として示されています。『百科全書』のテキストのレベルにおいて、諸科学間の連係や項目間および項目の内容間との関係を保証しているのはこの参照なのです。

しかしながら、参照によって出来上がる布置は直接目に見えません。この点において参照による布置は、『百科全書』の冒頭に掲載されてパラテキスト的装置をなしている「人間知識の系統図」とは異なります。というのも、「人間知識の系統図」は、人間知識の全体像を読者に提供しますが、知識に対するただ一つの観点しか示していないからです。そのために、『百科全書』の編集者は、既に「趣意書」の段階からその観点の恣意性を強調していたのです。

したがって、『百科全書』の編集者は、参照によって示される『百科全書』の布置が項目の読解を通じて浮き彫りになることを期待しています。この布置は省略や不備を含んでいますが、それらを補うのは読解でしかありえません。その上、『百科全書』はメタテキストの全ての特徴を示しているため、メタテキストとして読まれなければなりません。その結果、項目のテキストは、現象の連なりをたどることも観念の厳格な脈絡に従うこともできていないのです。そうであってなお、『百科全書』のテキストに参照が導入されるのは、『百科全書』の根底にある諸科学の一般分類の恣意性を読解によって補わせるためなのです。

■ 2011年度第1回大学院学生海外派遣の調査報告

百合草真理子（文学研究科 美学美術史学 博士後期課程2年）
イザベッラ・デステのストゥディオオーロ装飾に関する現地調査
派遣先：イギリス、イタリア
期間：2012年1月4日～1月18日

2012年1月4日から18日にかけてイギリスとイタリアを訪れ、ルネサンス期の画家コレッジョの対作品《美德の寓意》と《悪徳の寓意》(1530年頃、ルーヴル美術館所蔵)の意味解釈に関わる文献資料や図像の調査を行った。本作品は、

マントヴァ侯爵夫人イザベッラ・デステにより、彼女のストゥディオオーロ(小書齋)に設置するために注文されたもので、他の5点の絵画とともに、この空間に求められた機能を視覚化していたと考えられ、16世紀初頭の宮廷の建築構造と室内装飾の関係を知らうえで重要な作品である。

マントヴァ宮廷の人文主義者のもと構想され難解な意味をもつ本作品は、現在までの研究でその主題について十分に理解されているわけではなく、また、文学的典拠との関連や、建築空間との結びつき、さらに、コレッジョの様式展開における位置付けなど、考察すべき問題が多々残されている。こうした課題を踏まえ、本研究では、イザベッラの宮廷やストゥディオオーロというコンテクストのもとに本作品の解釈を試み、書齋の観想空間を形成するためにこの作品が果たした役割を明らかにすることを目指している。

今回の調査では、先行研究で未解決の図像に焦点を当て、全体の主題内容との関わりを検討することを目的とした。派遣先であったロンドン大学附属ウォーバーグ研究所(The Warburg Institute)には、古代から19世紀に至るまでに制作された彫刻、絵画、版画、タペストリーなど、約300,000点のイメージを撮影した写真が収集され、それらが約18,000の主題別に分類されている。本研究所では、コレッジョ作品と関連性の高い主題やモチーフを表した伝統的な図像との比較対照を通じて、作品解釈の方向性を考えるうえで有益な情報を得られた。また、フィレンツェ国立中央図書館(Biblioteca Nazionale Centrale di Firenze)では、典拠の一つと推測されるエクイコラの『愛の本性』(1525年)に関わる著作を閲覧し、当時の文学的状況の一端を窺うことができたほか、近年の論考にあたり、最新の研究動向を知るための文献の収集を行った。加えて、フィレンツェでは、イザベッラよりやや時代の下る、フランチェスコ・デ・メディチのヴェッキオ宮殿内の書齋を実見し、この空間を育んでいった当時の人文主義的な営みを垣間見ることができたのも大きな収穫であった。

本調査を通じて得られた知見と情報に基づいて、場とイメージの関係性へと考察を深めていけるよう今後の研究を進展させていきたい。

■ gCOE スタッフ海外出張報告

小川 正廣 (gCOE 事業推進担当者・西洋古典学)

明朝中国における西洋古典の受容に関する調査

2012年1月4日~11日の旅程で中国・南京、鎮江、上海の大学・図書館・博物

館を訪問し、明朝末期 17 世紀初頭におけるカトリック・イエズス会宣教師マテオ・リッチと中国の学者・政治家徐光啓の邂逅からユークリッド『原論』の漢訳『幾何原本』の刊行(1607 年)までの資料を調査した。まずリッチが徐と最初に出会ったのは南京であり、それは 1600 年のことだったと伝えられるが、その事情については不明な点が多く、南京図書館と南京大学図書館では、『当利瑪竇遭遇中国』『利瑪竇与中西文化交流』などの文献を閲覧できたことは有益であった。

次にイエズス会と徐との交流全般と『幾何原本』の成立に関しては、とりわけ上海・徐家匯にある徐光啓陳列館が重要な情報を提供してくれた。当館には一昨年秋にも立ち寄ったが、そのときは残念ながら閉館していた。今回は GCOE の総括論集と *Hersetec* に『幾何原本』について二つの論文の掲載を予定しており、幸いにも入館して調査することができたことは、拙論のデータの最終的裏づけと論旨の検証に役立った。さらに徐家匯では、上海図書館附属・徐家匯蔵書楼(Xujiahui Bibliotheca, 清朝時代に創設)や土山湾博物館も訪問し、名古屋大学の上海事務所にも近いこの地区が、中国ひいては東アジアの科学と文化の近代化の最先端の場所であったことをあらためて確認した。徐家匯とはそもそも、農学者でもあった徐光啓が開墾して彼の子孫が住んだ土地だったのであり、そうした歴史的事情は、徐光啓という人物がギリシア古典数学の受容のみならず中国の科学と文化の西洋化全般に果たした基礎的貢献の大きさを物語るものであるということを再認識できた。

ちなみに中国では一般に英語が通じにくいだが、徐光啓の陵墓のある光啓公園近くの土山湾博物館内を案内してくれた館員は英語だけでなくフランス語もじつに流暢に話した。徐家匯の神学校では清朝末期の教育家馬相伯の時代からフランス語はラテン語とともに熱心に教えられたが、その西洋語教育の影響が現代まで続いている様子にも、中国史上ずば抜けて開明的だった徐光啓に始まる徐家匯地区独特の文化的伝統を垣間見る思いがした。

次回のメール版 NewsLetter の発行は 2012 年 2 月下旬 を予定しています。

.....
GCOE 「テキスト布置の解釈学的研究と教育」
Hermeneutic Study and Education of Textual Configuration
<http://www.gcoe.lit.nagoya-u.ac.jp/>

NewsLetter No.52

発行：GCOE 編集部

編集担当：平野克典

Copyright(C) 2012 NAGOYA UNIVERSITY, GRADUATE SCHOOL OF LETTERS

.....